

介護実習を実施することの意味 — KOMI チャートシステムを利用した実習振り返りを通して —

The Importance of Practical Training in Nursing Care — Employing the KOMI Chart System to Reflect on Practical Training —

長 岡 さ と み
Satomi Nagaoka
佐 藤 完
Tamotsu Satou

(要 約)

平成 19 年 12 月、社会福祉士及び介護福祉士法の一部改正がされ定義規定の見直しがされた。介護福祉士の行う「介護」を「入浴、排せつ、食事その他の介護」から「心身の状況に応じた介護」に改められた。心身の状況に応じた介護とは、ICF(国際生活機能分類)の思想や憲法 13 条の幸福追求権に基づく介護を求められていると考える。この介護を提供するには既存のアセスメント概念では難しいと判断した。そこで KOMI チャートシステムを通して介護福祉学を学ぶ学生に福祉サービスを利用する人たちに寄り添うことの意味を問うた。

(キーワード)

介護実習、KOMI チャートシステム (ケア・デザイナーⅡ Ver. 3.11)、自己覚知

はじめに

本学での介護実習において、介護実習Ⅰは1年次の8月に10日間、介護実習Ⅱ-1は1年次の12月、2月、3月で20日間、介護実習Ⅱ-2は2年次の9月に20日間実施している。介護実習Ⅱ-1・2では受け持ち利用者を決め、個別の介護を学ぶ。受け持ち利用者をもつ目的は、個別の介護を学ぶ以外に、一人の利用者とじっくり関わることで、学生が介護とは何かと考える機会となり自己の介護観を育む機会とすることである。介護観を育むためには、介護することの意味や本質を学生自身がわかると実感できる実習である必要がある。中村(2009)は、福祉専門職を目指す実習生においても「人が人を援助するという対人援助をその活動の基軸としている社会福祉においては、援助者はまず自分自身について、ありのままの自分自身の姿(心理・心のありよう、行動、価値観など)に気づくことが求められている」と、自己覚知の重要性を述べている。また阿部(2008)は、福祉の職場に所属していれば「なぜ自分がこの人にかかわらなければならないのか」「なぜケアをするのか」といった疑問を絶えず抱くのだといい、その疑問を問い続けていくことの重要性を述べている。このことから、学生が介護について深く考えていくことは大変意義があり重要なことと考える。

今回、KOMI理論に基づいたKOMIチャートシステムを使用し、学生の受け持ち利用者との関わりについて実習の振り返りを行った。KOMI理論は問題思考型、医学モデルで利用者を捉えることを止め、その人のもてる力に力を貸していこうという目標思考型のケア方針を考えられるのが特色の一つである。つまりマイナス面を見ながらも、プラス面を考慮するツールであり、そこには国際生活機能分類(ICF

International Classification of Functioning, Disability and Health) の思想に通じる考え方があることは金井 (2004) も述べていることである。KOMI チャートシステムは、利用者の ADL 上の出来ること・出来ないことにとどまったチェックシートではない。KOMI チャートシステムは、学生が一人の受け持ち利用者の身体面、生活面の情報を丁寧に振り返るプロセスのなかで、人と人が関わる意味を考えさせることができるツールであると考えている。KOMI チャートシステムを使いこなせることが主たる目的ではなく、学生が自分自身で介護とは何かを問うことが必要と考えて利用した。KOMI チャートシステムを使用した学生の実習の振り返りのプロセスについて学生の 2 事例を検討したのでここに報告する。

1. 方法

本研究の対象は、本学人間介護福祉学科・平成 21 年度生 2 名である。平成 22 年 10 月～平成 23 年 1 月までの期間、KOMI チャートシステムを用いて介護実習の振り返りをさせた (介護実習Ⅱ - 2 で一人の受け持ち利用者を決め、短大指定の用紙に沿って個別の情報収集、アセスメント、介護計画立案から実施、評価までを行っている)。KOMI チャートシステムの生活過程 15 項目については、長岡・佐藤で「観察できた事実」「生活に制限があること」「今もっている力」に分類した書式を用い詳細を記録させた。KOMI チャートシステムのグランドアセスメントについても、長岡・佐藤で「アセスメント」「ケア方針」のみの書式を用い記録をさせた。

KOMI チャートシステムにかかわる教育内容

- ・1 年生次「介護過程演習Ⅰ」「人間福祉Ⅰ・Ⅱ」、2 年生次前期「人間関係Ⅱ」の講義時に KOMI 理論、KOMI チャートシステムについてふれる。
- ・2 年生次後期「介護過程演習Ⅴ」「介護総合演習Ⅳ」の第 1 回目の講義で KOMI 理論、KOMI チャートシステムについて学習。

2. 結果

【学生 A】

1) 介護実習中と介護実習後での介護過程内容の変化

介護実習中の受け持ち利用者の介護過程記録に記載された情報のなかで、今の生活 (施設) の方が良いと言っているが、「はやく施設から出たい」「人と関わるのが嫌」だという T さんの相反する思いを挙げている。アセスメント内容は、ほぼ情報をそのまま書いているが、実習ノートからは T さんが買い物や散歩、外でコーヒーを飲むことやおしゃれを楽しみたいという思いをもっている人だということを感じ取っている。そのことは、実習中にアセスメントした『人と関わるのが嫌い』『施設をでたい』と言っており、お部屋で過ごされることが多く、人との関わりが少ない「やりたいと思っていることがあるが実際にはできていないこともある」という事に意味づけを見出していたといえる。しかし学生は「T さんは統合失調症で気分が沈みがちなことがある」と受け持ち利用者の寂しそうな姿や、生気のない様子の背景に潜む利用者の思いを感じつつもアセスメントにつなげられなかった。

KOMI チャートシステムを使用し、更に生活過程 15 項目については「観察できた事実」「生活に制限があること」「今もっている力」に分け詳細を振り返らせたところ（図 1～6 参照）、振り返りでのアセスメントは、人との関わりが少ない T さん、やりたいと思っていることがあるが実際にはできていないこともある T さんだけではなく、内面では思いや感じていることがしっかりある T さん、やりたいことはたくさんあり、歩行器や電動カーがあれば移動・外出ができる T さん、声をかけると興味・関心があるものには関わり、日常生活に変化があることを楽しみにしている T さんでもあると学生の捉え方が変化した（表 1 参照）。

2) KOMI チャートシステムを使用した記録

図 1. 基本情報シート

図 2. 固有情報シート

図 3. 症状・病状シート

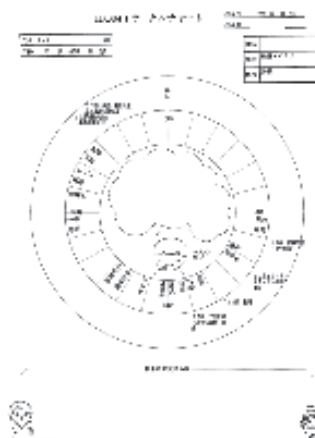


図 4. KOMI サークルチャート

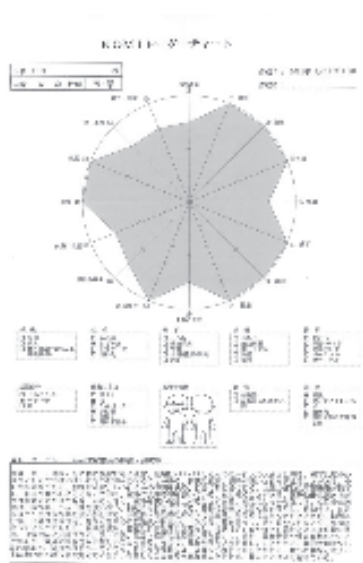


図5. KOMI レーダーチャート

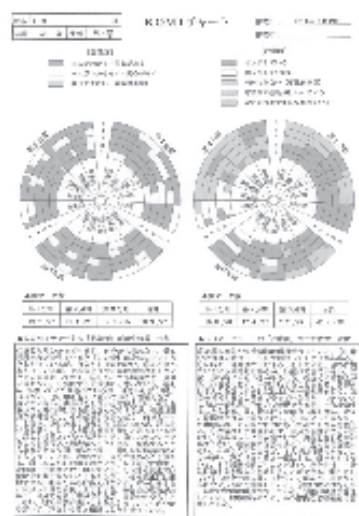


図6. KOMI チャート

表1. 介護実習中と介護実習後の振り返りでのアセスメント・ケア方針

アセスメント	ケア方針
<p>(介護実習中)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人と関わることが嫌い」「施設をでたい」と言っており、お部屋で過ごされることが多く、人との関わりが少ない。 ・やりたいと思っていることがあるが実際にはできていないこともある。 	<p>(介護実習中)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まわりの人が知らない特技や趣味を生活の中で活かす。
<p>(介護実習後の振り返り)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中で表情や感情の表出、発言が乏しく「人との関わりが苦手」と言っているが、声をかけてお話を始めるとたくさんお話をするなど、内面では思いや感じていることがしっかりある。 ・ふらつきがあり、転倒の恐れもあるのであまり動かないが「電動カーがあれば外出がしたい」「料理が作りたい」とやりたいことはたくさんあり、歩行器や電動カーがあれば移動・外出ができる。 ・生活に変化・刺激が少なく、Tさんの特技が発揮される場が少なく何事にも関心が低いが、お誘いなどをして声をかけると興味・関心があるものには関わり、日常生活に変化があることを楽しみにしている。 	<p>(介護実習後の振り返り)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Tさんの思いや望みをくみ取れるよう個別で関わる時間を持つ。 ・散歩や外出などに出掛け、今の身体の機能を維持する。 ・移動時は、転倒防止のため見守りや声かけを行うことによって転倒への恐怖心を和らげる。 ・意欲・関心が高まるような声かけ、関わりを行う。人との交流が少ないため、職員さんから積極的にレクリエーションやお散歩、外出などへ積極的に誘いをすることで人と交流する機会が増え、レクリエーションでは、ビーズ手芸やフラワーアート、編み物など様々なことをやることでTさんの特技が表現・発揮できるような場となる。ここから生活の意欲が高まる。

【学生 B】

1) 介護実習中と介護実習後での介護過程内容の変化

介護実習中の受け持ち利用者の介護過程記録に記載された情報は、実習後の振り返りで KOMI レーダーチャートに示された生命力が小さくなった部分と概ね重なった項目を中心に書かれていた。その内容は出来ないこと、したいが出来ていないことをとりとめもなく書かれた情報が大半を占めていた。学生が見たまま聞いたままがそのまま情報となっていたため、アセスメントへの発展が困難となっていたことは学生 A と同じである。しかし学生の実習ノートには利用者と共に意味ある時間を過ごした経過が詳細に綴られていた。実習指導者からは「同じような事ばかり書くのではない」「日記帳のようだ」「虫眼鏡で見ないと読めない」などと揶揄された学生の実習ノートである。受け持ち利用者との関わりを日々実習ノートに残していくことで日中何もする事がなく一日中目をつぶってしまう S さん、障害のため服が汚れてしまい不快感が残る S さんから自分なりの楽しみを探し出している S さんということに気づけていた。しかしそこからアセスメントにつなげられなかった。

KOMI チャートシステムを使用(図 7～12 参照)し、更に生活過程 15 項目について整理してみると、受け持ち利用者の生活ぶりが生き生きと浮きだっけきそうな内容となった。KOMI チャートシステムを使用したアセスメントでは、もっといろいろな会話を楽しみたい S さんであり、施設での暮らしやすい方法を常に探して行動している S さん、今自分が出来る可能な身だしなみを整えることを本人は望んでいる S さんでもあると学生の受け持ち利用者の捉え方がプラスの方向へと変化した(表 2 参照)。

2) KOMI チャートシステムを使用した記録

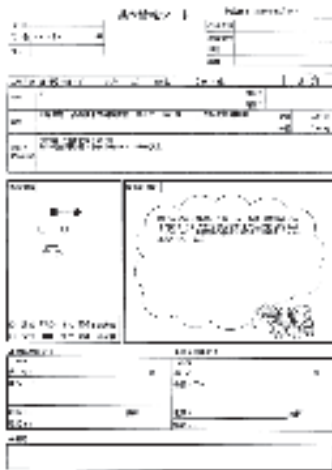


図 7. 基本情報シート



図 8. 固有情報シート

図9. 症状・病状シート

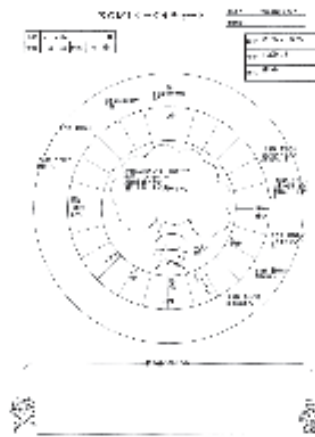


図10. KOMI サークルチャート

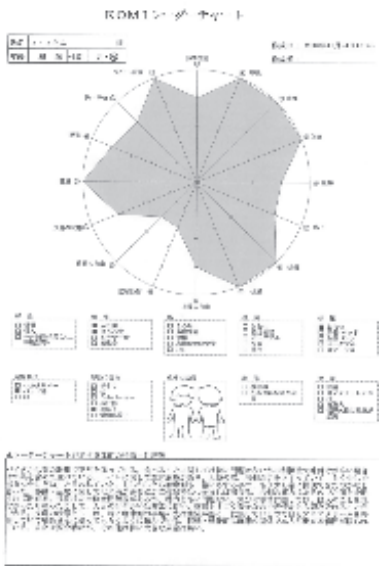


図11. KOMI レーダーチャート

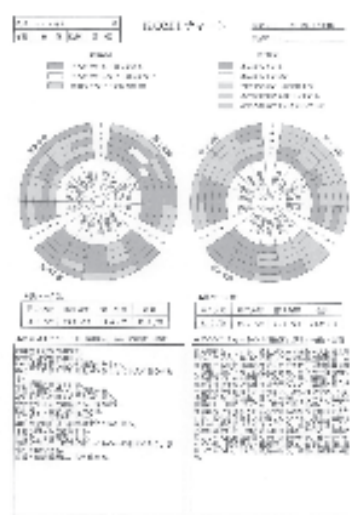


図12. KOMI チャート

表2. 介護実習中と介護実習後の振り返りでのアセスメント・ケア方針

アセスメント	ケア方針
<p>(介護実習中)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日中何もする事がなく、一日中目をつぶってしまい夜中に目が覚めてしまい眠れなくなってくる。 ・口元がゆるんでしまうのは障害のため仕方がないが、服が汚れてしまい不快感が残る。 	<p>(介護実習中)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日中は元気にSさんらしく過ごしてほしい。(Sさんらしさ＝明るい笑顔) ・どこも汚さずに上手く口元を使い清潔さを保つ。

<p>(介護実習後の振り返り)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・左片麻痺のため、ベッド以外では車椅子生活であり、施設入所前は旅行が好きで、よく遠出をしていたが現在は体力には自信があるが左片麻痺のため歩けないので外出（旅行という趣味）をすることに関して今の自分の状況を見て積極的ではなくなった。だが、施設での可能な運動は積極的である。性格の面でも車椅子を自操する際、甘えたいという気持ちが大きいのか自然な甘えの欲求があり「甘えたい」衝動がある。ただし本人が「これは、こういう風にすれば効率が良い」という様に施設での暮らしやすい方法を常に探して行動している。 ・旅行以外にも、趣味である庭いじり、お茶、刺繍、着物（和装）など多趣味なSさんだが、施設に入所してからは道具もなければ両手が使えず片手だけというデメリットがあるため、それに伴い趣味に対する意欲が普段の生活の中で薄れがちである。周りの環境からか話し好きのSさんが職員以外で元気な利用者と話をする程度で実習をしていた時に、私とたくさん話をしてくれた。普段のSさんの雰囲気からもっといろいろな会話を楽しみたいと思っている。 ・施設入所前は化粧品も自分で行っていたが麻痺で片手しか使えなくなってしまい、現在は簡単な髪を整えるぐらいしか行っていない。本人が身だしなみを気にするのは、ごく自然なことだと言っていた。Sさんの今までの行動を読む限り、自然なことを自然でいたいということなのかなと思った。「自然」の意味は何もしないというのではなく適度に自分にあった感じが好きということではないかと思う。今、自分が出来る可能な身だしなみを整えることを本人は望んでいるのだと思う。 ・夫が面会に来る時にメロンパンや他に差し入れ（食べ物）などをたくさん持ってくる。Sさんは好き嫌いがあまりないので、出されたものはほとんど食べてしまう。実習中に夕食前であろうと夫が持ってきたメロンパンを一気に5つも食べた時があつて、職員も驚き、私自身も驚いた。食事では、体重の増加が気になり減塩を行っているが今の状況では、いくら施設の食事に気をつけても変わらない。 	<p>(介護実習後の振り返り)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎日趣味の時間を一緒に共有することで、自然と意欲が高まり人と関わる時間が増える。 ・支援を受けながら、自分が望む生活スタイルが広がる。
---	---

3.考察

KOMI チャートシステムを導入し介護実習の振り返りをさせていく過程において、私たちがいかに無意識に、かつ容易に問題点のみを中心に思考をしているかを改めて実感することとなった。そのことは学生が介護実習中の受け持ち利用者の介護過程記録に記載した情報、アセスメントシートをみると理解できる。情報収集用紙による生活上の出来ること出来ないことのチェックだけでは、受け持ち利用者の豊かな生活像は描き出されないのである。「あれも出来ない、これも出来ない」とチェックされる中からは、出来ないから出来るようにする支援が必要だという一方通行の介護支援の発想しか出てこないということである。しかしKOMI理論は問題点思考をしないというところに大きな意味があり、介護福祉を学ぶ学生が受け持ち利用者との関わりを通し学ぶ意義を考えるツールとして用いたのである。そして金井（2004）が述べているように、KOMIチャートシステムを用いて、出来ていること、やっていることに目を向けることはICFの思想に通じると考えている。

KOMI チャートシステムの生活過程 15 項目については、「観察できた事実」に基づき「生活に制限があること」「今もっている力」について詳細に振り返りをさせた。そのなかで学生は、観察したと思っていた事が老いや病や障害のため制限された事なのか、学生自身ができないと思いついていた事なのか、職員が日々の業務のなかでそうしていただけた事なのか等、わからなくなるという壁にぶつかり、今もっている力はもっとあったのではと考え始め、書けないと悩みこんでいた。そして学生は介護実習ノート（裏面に詳細に書かれた学生の視点によるエピソードも含め）をひっくり返しながらかえ抜いた末、実習中にはそこまで考えてもみなかったということに気づいていった。受け持ち利用者の生活の全てが 15 項目に記入しきれないわけではないが、利用者との関わりの場面のなかで、どの場面を書き出せばよいのかを悩み、個々の生活を映し出す場面を書くとなると、どれほど深く関わられたかが大きく影響してくることに気づいていった。これらの気づきは、学生が介護実習Ⅱ - 2 報告集の考察で、「KOMI チャートに落とし込んでいると、こういうことができるんだ、この到達目標にしたけど、こちらのニーズではないのか」という気づきがたくさんあったように思う」「KOMI での記録をしていて情報収集できていなかった項目をみると、些細なことかも知れないけど、とても重要なことで見逃していることが多かった。『陽光が気持ちよく感じるか』など、自分のなかで、それが当たり前の生活だと思いついてしまっていると思う。でも、この私が当たり前と思いついていないことができない方もみえる。その方が陽光を気持ちよく感じる事ができているのか、気づいていけるようになりたい」「今回、実習が終了してから改めて振り返ってみて、受け持ち利用者についてまだ私が知らない部分がたくさんあると感じ、入浴介助・移乗介助で関わることの出来ないことに気付いた」などと書いた内容からもうかがい知れる。

学生が受け持ち利用者との関わりについて実習ノートに書き出すと、実習指導者には日記帳のようだと揶揄された。学生が書き出した受け持ち利用者と学生相互の語りかけと応答の様子が詳細に綴られた内容がそこにはみられた。学生が得た受け持ち利用者の情報がいかに意味のある情報になるか否かは、いかに人間味のある語りかけと応答ができたか、またそのような場面をこぼすことなく書き留めることができたかが大きな鍵となっていた。

学生 A は、受け持ち利用者 T さんを「統合失調症で気分が沈みがちなことがある」と実習中の介護過程記録の情報欄に記載していたことから、T さんの沈みがちな様子がとても気になっていたと考えられる。T さんとのやりとりのなかで「テンションが高く、このような T さんを始めてみて知らない一面を知ることができた。また、普段 T さんから話しかけてくださることがあまりなかったが、この日は買い物での出来事を詳しく話をしてくださった。」と、実習ノートの中では T さんの言動に敏感に反応し、素直に喜びを感じている学生 A がいた。そして「少し照れながら笑ってくださった。こちらも笑顔になれた。」と書かれたなかには、T さんと学生 A との関係が、あなたであるがあなたではない、私であるが私ではない、あなたであり私である関係がその場に確かに成立していたと考えられる。T さんと学生 A のその時その場は T さんのその時その場でもあったといえるだろう。

学生 B は受け持ち利用者 S さんと趣味や旅行、新婚旅行、会社勤めをしていた頃の会話をしていて、「利用者に友達と言ってもらえた事がとても嬉しかった。表情がとても穏やかで私もホっとした。」と実習ノートに記載している。S さんにとってもその場は趣味や旅行、新婚旅行、会社勤めをしていた頃を

懐かしく語れた場であり、かつ楽しく輝かしい経験を回想できた時間であったと考えられる。Sさんのその時その場も学生Bのその時その場でもあったといえるだろう。その時とその場は受け持ち利用者と学生にとって八木洋一（風跡 第35号）のケアの人称性の概念である、1人称態でも2人称態でも3人称態でもないケア、つまり0（非）人称態としてのケア（統合の働きとしての〈いのち〉の働きの〈場〉である）の場であったろうと考えられる。実習振り返りの考察で学生Bが「Sさんと関わりを深めたと思う」と書いた関わりとは、お互いに語りかけ応答し受容し合った時間と場所、つまりコミュニケーションのなかでお互いを高めあえた瞬間と考えられはしないだろうか。八木誠一（2004）は「そもそもわれわれ人間は、ただ生きて死ぬのではない。『関係として生きていることを理解しつつ生きている』」と述べている。まさしく人と人との関係性がその場にあり、その意味を問いかける事が重要なのである。

学生が介護実習中に受け持ち利用者との関わりについて語り、実習ノートに書き留めた言葉のなかから教員は感じ取り、更にその時の様子を逃さず深められるよう丁寧に導いていくことが介護実習指導ではとても重要となるのであろう。鷺田（2001）が「〈臨床〉とは、ある他者の前に身を置くことによって、そんなホスピタブルな関係のなかで自分自身もまた変えられるような経験の場面である」と述べている。また鯨岡（2010）は「『一個の主体である』という私の感覚は、自らの存在そのものに最初から内在して周囲の映し返しの影響があつてのもの、周囲の映し返しなしには成り立ち得ないものです」と述べており、私という主体は周囲の他者との関係のなかで立ち現れてくるものでもあるといえる。学生自身がどのような人間であるのかを利用者が教えてくれていることを自覚させなければならない。そのかけがえのない人との出会いこそが介護実習で出会った受け持ち利用者なのだというのである。

おわりに

学生は利用者になんかをしてあげたいという思いをもっている。時には何かをしなければ実習にならない、介護にならないと概念化され、介護技術をするということに先走る学生もいる。介護とはまずその人の傍に寄り添うことであろう。寄り添うとはその人の心に触れるということであろう。鯨岡（2001）は、このようなかかわりを「通底」と呼んでいる。

今回、介護実習の振り返りにおいてKOMIチャートシステムを使用し、介護するとはどのようなことなのかを自問自答し学生が自ら気づいていくという自己覚知される感覚を経験させることができた。学生にとって実習施設は、まさに人と人が触れ合う臨床の場であるはずである。自分という存在を他者が気づかせてくれる。自分が受け持つ利用者によって、個々の利用者の有する「佇まい」に寄り添い合うと同時に利用者と学生（学生と利用者）が通底し合う事により学生自身をも「己の存在」を知らしめてくれる。そのような場を有する介護現場で行われる実習のもつ意義は大きく他者とのかかわりを第一とする介護思想の場が確かにあると確信するものである。

参考文献

- 金井一薫：「KOMI 理論－看護とは何か、介護とは何か－」，現代社，2008.
- 金井一薫：「KOMI 記録システム－ KOMI 理論で展開する記録様式」，現代社，2004.
- 金井一薫監修：「教えて！KOMI 先生！－まんがで学ぶ KOMI 理論と KOMI 記録システム－」，現代社，2008.
- 鷺田清一：『『聴く』ことの本質 臨床哲学試論』，TBS ブリタニカ，2001.
- 鷺田清一、内田樹、釈徹宗也「おせっかい教育論」，140B，2010.
- 鯨岡峻：「ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性」，ミネルヴァ書房，2010.
- 鯨岡峻：「原初的コミュニケーションの諸相」，ミネルヴァ書房，2001.
- 鯨岡峻：「エピソード記述入門 実践と質的研究のために」，ミネルヴァ書房，2010.
- 阿部志郎、河幹夫：「人と社会 福祉の心と哲学の丘」，中央法規，2008.
- 阿部志郎：「社会福祉の思想と実践」，中央法規，2010.
- 八木誠一、小栗榮子他：「介護の思想－なぜ人は介護するのか」，久美株式会社，2004.
- 四国学院大学八木研究室内，『風跡』第35号，2009.
- 中村剛：「福祉哲学の構想 福祉の思考空間を切り拓く」，株式会社みらい，2009.
- 上田敏：「ICFの理解と活用」，きょうされん，2006.
- 五木寛之：「人間の関係」，ポプラ社，2007.
- 建部久美子編：「臨床に必要な介護概論－介護概論」，弘文堂，2007.
- 三重県介護福祉士養成施設協議会編「三重県版 介護実習の手引き・介護実習ノート」，中央法規，2011.